

グリーンツーリズム 農家民宿で農村再生

若者が戻ってくる地域づくりを探る 月収40万円と高齢者が地域の資源

【趣旨】

限界集落を若者の声があふれる農村に再生しようと農家民宿の里づくりを進める、世界農業遺産のスポット地区「春蘭の里」。里づくりに関わってきたゲストを迎え、若者が月収40万円を確保して農村で暮らしていける「仕事づくり」を考える。外国からも含めた交流人口拡大をさらに拡大するための旅行客への対応は？ トキが舞う里の農業をどう再生するか？ 農村に若者が帰ってこられる条件は？ 農村に移住している若者にも参加してもらい、探っていく。

【ゲスト】

高橋 森哉

ホスピタリティツーリズム専門学校

東京都中野区になるホスピタリティツーリズム専門学校旅行学科の先生。

ヴァファダーリ・メッヘリージ・カゼム

立命館アジア太平洋大学 観光学助教

イランから日本に来て、日本の農村に深く興味を持ち、グリーンツーリズムの研究と農村再生に力を入れる。

小柴 有里江

農林水産政策研究所 研究員

2008年から3年間、金沢大学「能登里山マイスター養成プログラム」に従事。農産物直売所や6次産業化の専門家。

【コーディネーター】

花垣 紀之 財団法人都市農村漁村交流活性化機構 業務部次長

都市と農村の交流を促進し、教育旅行と農家民宿の推進を行う。グリーンツーリズムの専門家。

協力団体 ● 春蘭の里 実行委員会

会場 ● 春蘭の宿（鳳珠郡能登町字宮地16-9）

参加者 ● 32名

1. 分科会要約

3名のゲストの自己紹介を通してそれぞれの活動、経験値、体験談などに基づいた先進地事例の発表。

その後、コーディネーターから今後の農業・農村のありかたについて、現代の社会情勢を踏まえて以下の2つのテーマをあげる。

- ・どうやったら農業を続けていけるのかな？
- ・どうやったら農村で暮らしていけるのかな？

このテーマにもとづき、それぞれのゲストが専門分野ごとに発表。(高橋森哉氏：観光の視点から、ヴァファダーリ・メッヘリージ・カゼム氏：国際的な視点から、小柴有里江氏：6次産業化の視点から)

ゲストの発表が終了後、実際に春蘭の里を訪問、また若くして農家民宿を開いた若者が体験談を語ってくれた。立命館アジア太平洋大学の学生は、イタリアでのホームステイを体験して得たこと、徳島県出身の学生は、地元、徳島県勝浦市が「彩り」に注目した地域づくりについての発表をしてくれるなど、若者の考えを述べてくれた。他にも台湾から春蘭に移住してきたワンさんや春蘭の里で農家民宿を経営している木村兄弟が、実際に農家民宿の経営に携わるこれからの春蘭の里を支えていく若者たちの今の気持ちも聞くことができた。



2. 開催で得たもの（新しい発見）

地方の農村地域では、高齢化、少子化から過疎が進み10年後、50年後、100年後…農村はどうなっているだろうか？ この問題への取り組みとして、農家民宿を核とした地域再生がある。

昨今、子供たちがコミュニケーション力を育む場となる環境が失われつつある。大人と関わる時間が少なくなっていることや外で自然とふれあい友達と遊ぶ時間などが減っている。

本来、生きていく過程で必要且つ大切な能力、コミュニケーション力はそういった生活環境の中で育まれていくものだが、現代の子供たちはそのような経験・体験ないままに大人となっ

ているといえる。なんと、1日で外で遊ぶ時間はたったの14分だったり、家庭での会話がな、我が子の関与が少なくなっているなどの状況を知った。これは子供たちが悪いのではなく今の社会がそうさせてしまった。そして、今の子供たちが生きる力を育むのが難しい時代になっているのではないだろうか。このような現象は、都会だけでなく今では地域で暮らす子供たちも同じ現象が現れているようだ。

そこで、農家民宿での体験を通して、家族愛や自然、生き物とのふれあいを体験することが、コミュニケーション力(会話力)の向上に繋がっていることに農家民泊体験をした子供たちからのアンケート結果では、一番楽しかったことは他にどんな楽しく興味ある体験があっても農家のお父さん、お母さんと会話をしたことが心に残ったという回答が100%であった結果があがっている。

都会で暮らす人たちにとって農家民泊の体験は、本来人間として生きる力を育む場でもあるといえる。「田舎のじいちゃん、ばあちゃんが育てた次男、次女が都会で活躍してきたことで、戦後の日本の経済成長を支えてきた」と、先進地「春蘭の里」実行委員長の多田氏から話があった。これは、家族愛あふれる農家で育った子供たちが、日常生活において育まれてきた人間力を身につけ社会進出することで日本経済を支えてきたように感じる。

農家民泊体験では、本気で叱られる。息子、娘のように可愛がられる。温か

い家族愛など、昔は当たり前にあった家族のカタチを体験することができる。このことによって体験者は人間力、会話力を育まれ、受入れ側にとっても、生きがい、感動が相互に生まれる。

これらのことは、さまざまな視点や体験談、事例からも立証された。日本の田舎には昔と変わらぬ日本の原風景や生活スタイルがまだ残っている。手がかけていないそのままのスタイルが観光商品である。その他、地域住民が根強く守り続けてきた文化、風習、歴史などすべてが観光商品である。その中の一つに「祭り」がある。

しかし、最近では神輿の担ぎ手不足や高齢化が進む問題から祭りをやらなくなった地域が増えているが、祭りをを行う事によって地域のまとまりやふれあいが生まれ、地域が元気になることがいえる。そこで、この祭りを復活させ地域再生を考えている地域が増えている。この地に暮らす人たちが代々守り受け継いできたものであり、地域の人たちの熱意、魂が込められたもの、伝統ある歴史、文化、風習が長く受け継がれてきたものである。この「祭り」を通して、地域住民とよそから来た人たちが一緒になって熱い思いにより、心と心のつながり絆が生まれる。感動の体験となるであろう。

地域に暮らす元気な高齢者は大切な地域の宝である。昔ながらの近所づきあいが今もなお残っているからこそ、日頃のコミュニケーションができてい。農業には生きる知恵・力、人間力

が育まれる。



3. 分科会まとめ

これからの日本国は、第六次産業の時代である。第一次産業×第二次産業×第三次産業 = 第六次産業である。何にゼロをかけてもゼロにしかならない。どの産業も欠けてはならず、協力し合った第六次産業であることが大切である。

農家民宿だけががんばるんじゃない。農家民宿だけでは農村再生はできない。地域の助け合い、手助けがあつてこそである。

4. 今後に向けた展開

昔は農村での暮らしてきた人たちが経済成長を支えてきた。農家民宿を核として地域再生、世界農業遺産「能登里山里海」保全、移住交流人口増大、農業で雇用、就農人口拡大を通じて『ここで仕事できるかも』という町づくりをしていくこと

5. 参加者の声

18年ぶりの祭り再生に対して、はじめは地域住民からは賛否両論であつ

たが、実際に行ってみると感動の声があがり来年もやりたいと前向きな意見が多く出た。祭りを行ったことで地域に元気がでたように感じた。祭りを行うことは、キリコ、神輿の修繕や準備作業から人即、片付けなどのすべての工程に参加することで、ものづくり体験、歴史、文化、風習、人と人のふれあいなどを体験することができる。

しかし、現在地域では人で不足により神輿、キリコの担ぎ手がなく祭りを行うことが困難となっている。そこで、担ぎ手の募集をかけ、よそ者・若者を呼び寄せて協働で祭りを行えないかと考えているが、地域住民にどのように呼びかけてよいのか、また地域住民の思いはどうなんだろうか？などを実際に「祭り」体験を実施された春蘭の里の方に訪ねた。地域がずっと続けている文化は「祭り」である。来年は大阪の中学生が担ぎ手となって4軒半×2本、3軒×1本のキリコを出動予定。これは子供だけでは担げないので地域の大人の協力が必要である。集落全体の理解・協力をもって取り組む。現在の農家民宿は30軒であるが、オズ中学校受入れに向けて農家民宿拡大により40軒の農家民宿を確保。来年は新たなきっかけ「祭り」で盛り上げていく。

6. その他

大学・高校との地域の連携。これがないと農村の再生はおぼつかない。農村は今までにいい人材を都市に供給してきた。日本が世界第二位の経済大国

になり得たのは、農村漁村から出て行った次男坊、三男坊、娘達が大都会に行き来し、きちっと働いた。それは、親父・じいちゃんの道徳教育を



きちんと受けて育ったことが日本の経済成長を支えてきた。

このような人材を輩出してきた田舎が今はだめになりつつある。だとしたら、その田舎を再生するために都市にある大企業の地域の利用の仕方、雇用、社内研修、休暇をうまく利用するカタチ。大学との連携。若者を中心とした取り組みができる。陶芸家が春蘭の里を訪ねられ、「何かお手伝いできないか」と言われ、地元の土を使った陶芸を産み出した。今後、地域産業としていきたいと考えている。

春蘭の里 実行委員長 多田氏のコメントより